

東日本大震災被災地での支援・調査活動を通じて* ～宮城県気仙沼市大島での 2011 年度活動報告～

J.Nagamine et al., The 2011 Report of Volunteer and Research Activity in Kesenuma Oshima Area Damaged by the Great East Japan Earthquake

長峯 純一 (代表) / 今井 一郎 / 上野 真城子 / 亀田 啓悟 / 客野 尚志 /
小池 洋次 / 長谷川 計二 / 久野 武 / 室崎 益輝 / 山田 孝子 /
そして参加した学生

Junichi Nagamine / Ichiro Imai / Makiko Ueno / Keigo Kameda / Takashi Kyakuno /
Hirotsugu Koike / Keiji Hasegawa / Takeshi Hisano / Yoshiteru Murosaki / Takako Yamada
and the students who joined this project

1. はじめにー東北支援のきっかけー

総合政策学部では、2011年3月11日の東日本大震災発生後、現地での支援活動を実践し、また被災地に赴き何らかの支援活動に加わりたいとの学生の声を実現すべく、教員有志による震災支援委員会なるグループが自然発生的に発足した。とは言え、今回の被災地は広範囲に及び、復旧には少なくとも今後数年間という長い期間を要するであろうこと、そしてわれわれが関西から支援活動に赴くには地理的に遠方にあるといったことから、それをどう具体化するかで思案した。現地でボランティア活動をするとしても、多人数で訪問し大きな支援活動を行うことは難しいであろう。よって、一過性の支援でなく、規模は小さくとも現地とのつながりを持ちながら、継続的に支援できる場所を探そうということで方針がまとまり、被災地の情報収集と支援先の検討を始めた。

その間、有志教員の1人であった長峯は、被災

地である宮城県気仙沼市の出身であったことから、震災後、現地との往復をする中で支援先とその方法についての情報提供を行ってきた。そうした経緯から、気仙沼市大島地区を継続的な支援先としてはどうかとの提案を行った。その理由は、大島は離島であるため、被災直後は孤立した状況に置かれ、行政からの支援も十分に届かず、ボランティアも入りづらい状況にあったこと。その一方で、大島では地域コミュニティの力が強く、当初、島民たちが支え合うことで被災の困難に耐えていたが、ライフラインも徐々に復旧することで、われわれが関西から時間をかけて現地を訪問しても、数日間の滞在ができれば、素人である教員や学生でも何らかの貢献ができそうな状況にあったことからである。そして、5月初頭に教員4名で現地を訪問し、現地の人たちと意見交換を行う中で相互の信頼関係も少しずつ醸成され、ボランティアを受け入れてもよい、との声を頂いたのである。

* 本稿は、長峯が執筆している部分と他の教員メンバーおよび学生からの寄稿部分で構成され、全体を長峯が編集している。寄稿部分についてはそれぞれ執筆者の名前を入れている。学生たちの学年は訪問した当時のものである。とくに名前のない節・項は長峯が執筆した部分である。また、本稿で説明していく気仙沼大島の浸水マップ作成のための調査は、関西学院大学「東日本大震災関連共同研究」(2011年度)から補助を受けている。

気仙沼大島を支援する活動はこのような経緯でスタートしたが、その活動は2011年度を経て、2012年度へと引き継がれている。そうした中で本稿は、2011年度の大島での活動についてまとめたものである。以下、気仙沼市および大島の概要と被災状況を説明した後、2011年度全体の活動の内容について報告し、その後、各訪問時の活動内容を参加者から寄せられた感想という形でまとめていく。時系列的に活動を追っていくことで、被災地の状況が変化していく様子も窺い知ることができる。

2. 気仙沼大島での活動

2-1. 気仙沼市および大島の概要と被災状況

まず初めに、気仙沼市と大島に関する基本的な情報と東日本大震災による被災状況を数字で説明しておこう。まず地図1と地図2を見られたい。宮城県北部における気仙沼市の位置、その中で離島である大島の場所を確認して欲しい。仙台市から気仙沼市まで、車で一部高速道を通りながら移動すると、だいたい3時間弱かかる。さらに気仙沼市の内湾一番奥にある船の発着場（エースポートと呼ばれる）から大島の玄関口である浦の浜港まで、船で25分ほどである。



写真1：震災前の気仙沼市の風景・遠く大島を眺める(2006年撮影)



地図1：宮城県・岩手県の地図¹



地図2：気仙沼市の地図

1 地図1、地図2、地図3は「国土地理院」提供の地図を、GISソフトを用いて加工したものである。作業は客野准教授が行った。



地図3：大島全島の地図

気仙沼市の海岸部は陸中海岸国立公園に指定されており、大島の海岸部の一部と島の北側に位置する亀山も同公園内にある。観光と近海漁業・養殖業を中心とした島であり、大島出身の詩人・童話作家の水上不二は、かつてその景勝の美しさを、「海はいのちのみなもと 波はいのちのかが やき 大島よ 永遠に緑の真珠であれ」と表現した。この「緑の真珠」という言葉は、大島で活動する際に何度となく遭遇するキーワードである。

この大島の震災前の人口は3,200人ほどであった。人口のピークは1970年代で当時5千人を超えていたという。東日本では現在でもなお人の居住する人口最大の離島である。しかしながら、人口も観光客もその頃から徐々に減少傾向に入った。

写真1は、震災前、気仙沼市の市中心部に位置する安波山から、市街地を見下ろしつつ、遠く大島の亀山までを眺めたものである。この写真の穏やかな風景とは一変して、写真2は、震災直後の気仙沼市の中心部から南側方面に向かって、2011年3月14日に撮影された航空写真である（図表1の地区名で言うと、気仙沼・松岩・階上地区）。この写真の上部に見えるのが大島である。大島では、津波の翌日に気仙沼市内で発生した火災が飛

び火し、亀山も山火事になった。大島付近に見える煙はそれがまだ鎮火していない様子を物語っている。

次に、気仙沼市の被災状況を数字で追ってみよう。図表1は、気仙沼市における被災状況（死亡者数）を整理したものである。気仙沼市は13の地区に分けられるが、海岸に近い地区や山側の地区、またその地形の違いによって、死亡者数とその人口に対する割合には違いが出ている。市全体では震災直前の人口74,247人に対して、1,235人の方が亡くなられ、人口に対する割合では1.7%であった。地形が平坦で海岸部にあたる階上地区ではその割合が4.3%にもなり、地区全体が津波襲来後に火災になった鹿折地区では2.6%と、他の地区よりも被害が大きかったことがその数字からも分かる。



写真2：震災直後の気仙沼市の航空写真²

大島では、人口3,249人に対して34人の方が犠牲になられた。気仙沼市はリアス式海岸の特徴で山が海岸までせり出し、平地部分が少ない。大島もまたそうした地形にあり、小さな島であるが故に、海岸に面していてもすぐ後ろは裏山である。また過去には、明治三陸地震、昭和三陸地震、チリ地震の時に大きな津波に襲われ、住民たちの避難に対する意識も、他の地区より高かったと言われる。こうした状況があったことで、34名という犠牲者は出たものの、他の地区よりも割合的には少なくて済んだと言われている。

2 写真2の航空写真は、アジア航測株式会社がHP上で公開している東北地方太平洋地震の一連の航空写真の一つを転用したものである。2011年3月14日撮影とされている。HPのURLは以下の通り。<http://www.ajiko.co.jp/bousai/touhoku2011/touhoku_naname.htm>



写真3：大島の津波石碑³

次に、図表2は家屋の被災状況を整理したものである。上段の数字が家屋全体、下段の数字がそのうち住家のみ捉えた数字である。市全体で、全壊あるいは大規模半壊した家屋の割合は約30%であり、半壊と一部損壊を加えると40%以上にもなる。ここでも鹿折・階上両地区では60%を超える割合で家屋が損壊し、被害がきわめて広範囲に及んだことが分かる。大島でも、家屋・住家とも被災割合は40%弱になり、多くの人たちが、命だけはなんとか助かって、生活面で大きな打撃を受けたことが推察される。

以下、われわれの活動の方に話を移していこう。

2-2. 浸水マップづくりのきっかけ

5月初頭の教員調査チームの訪問の後、6月から12月にかけて教員と学生からなるチームを編成し、現地を訪問することになった。まず6月初めに先遣隊チームが現地に入り、現地でのボランティア活動を試行的に経験しながら、独自に支援ニーズの聞き取り調査を行った。現地でのボラン

地区名	人口	死者数	割合(%)
気仙沼	19,675	360	1.8
鹿折	7,743	204	2.6
松岩	8,712	119	1.4
新月	5,104	14	0.3
階上	4,795	208	4.3
大島	3,249	34	1.0
面瀬	6,234	57	0.9
中井	2,522	20	0.8
唐桑	3,424	34	1.0
小原木	1,652	47	2.8
小泉	1,809	40	2.2
津谷	5,288	24	0.5
大谷	4,040	74	1.8
全市合計	74,247	1,235	1.7

表注 情報は気仙沼市提供による。人口は2011年2月末時点、被災状況は2012年9月30日時点のものである。割合は死者数の人口に対する割合である。

図表1：気仙沼市および大島の被災状況(死亡者)

ティア活動への要望には、遅々として進まない瓦礫の撤去や片付け、海岸や農地に散乱するゴミの片付けに加えて、浸水マップの作成、井戸マップの作成、被災状況の記録作成といった声をいただいた。

浸水マップについては、すでに行政の作成したものが公表され始めていたが、それは航空写真・衛星写真に基づいて作成されたものであり、「実際の浸水域とのズレがある」「水はもっと上まで上がっていたはずだ」といった指摘が現地の人から聞かれた。

そうした現地の要望を踏まえて、気仙沼大島での支援活動に、瓦礫片付けといったボランティア活動に加えて、浸水マップづくりの調査活動を加えることにした。現地での実地調査を踏まえて、より正確な浸水マップを作成することは、今後の防災・減災対策を考える上で有用になるはずであり、行政による浸水マップとのズレの存在を検証することは、調査・研究のテーマとしても意義があり、そして何よりも研究機関である大学として、地域社会への貢献の意義も見出せるのではないかと考えたからである。

3 大島では、1933年(昭和8年)の昭和三陸津波の後、津波が遡上した場所3箇所にこのような石碑が建てられた。

地区名	全壊	大規模半壊	半壊	一部破損	計	全棟数	割合(%)
気仙沼	4,645	997	766	1,342	7,750	15,340	50.52
	2,713	553	475	1,186	4,927	10,220	48.21
鹿折	3,182	266	97	298	3,843	6,250	61.49
	1,880	152	73	277	2,382	3,641	65.42
松岩	1,246	120	174	749	2,289	6,334	36.14
	638	70	146	689	1,543	3,835	40.23
新月	4	14	52	397	467	5,105	9.15
	-	12	40	367	419	2,145	19.53
階上	1,746	215	197	560	2,718	4,417	61.53
	710	116	124	461	1,411	2,107	66.97
大島	776	202	95	346	1,419	3,743	37.91
	312	90	68	285	755	1,958	38.56
面瀬	582	95	90	503	1,270	3,589	35.39
	271	62	73	463	869	2,139	40.63
中井	212	9	21	172	414	2,356	17.57
	87	6	18	155	266	1,220	21.80
唐桑	999	57	78	207	1,341	3,594	37.31
	439	26	45	177	687	1,739	39.51
小原木	665	26	15	86	792	1,604	49.38
	307	10	10	77	404	750	53.87
小泉	1,108	57	30	82	1,277	1,845	69.21
	501	34	22	62	619	860	71.98
津谷	178	77	138	324	717	5,867	12.22
	72	54	101	257	484	2,816	17.19
大谷	1,110	173	138	253	1,674	3,759	44.53
	553	96	92	203	944	1,989	47.46
全市合計	16,453	2,308	1,891	5,319	25,971	63,803	40.70
	8,483	1,281	1,287	4,659	15,710	35,419	44.35

表注 情報は気仙沼市提供による。被災状況は2012年9月30日時点のものである。上段の数字は家屋全体、下段の数字は家屋のうち住家だけを対象としたものである。

図表 2 : 気仙沼市および大島の被災状況(家屋被害)



写真4 : 松岩地区とそこから見える大島

そしてちょうどこのときに、関西学院大学が震災後に特別に設けた「東日本大震災関連共同研究」の公募があり、その研究費を受ける機会も頂いた。かくして、その後の現地での浸水マップ作成のための調査活動は、大学共同研究費を活用して行うことが可能になった。

当初から支援活動に関わってきた教員メンバー

を眺めたとき、そこには一連の調査活動に必要な社会調査の専門家、地理情報システム (GIS) を活用したマップ作成と情報処理の専門家、そして浸水マップを地域の防災・減災対策に活かしていくための専門家、さらに同様の調査を阪神・淡路大震災で経験した教員が含まれていた。こうした専門知識を持つ教員がそろっていたことは幸運であり、まさにこの活動はわれわれに与えられた使命であると受け止め、共同研究も引き続き同じメンバーで進めることにした。

2-3. これまでの活動の全容

気仙沼市大島地区での2011年度の浸水マップ調査を含めた支援活動を、図表3の活動記録表にまとめている。2011年5月初頭の教員調査チームに始まり、同年12月にかけて計8回の訪問を実施した。教員・学生による15名ほどのチームで6回、

教員だけのチームで2回の訪問である。大学共同研究費を活用しての訪問および研究活動は、2011年8月の第3回訪問以降年度末までとなるが、調査研究活動の全体を説明するために、ここでは2011年5月から2012年5月までの活動として報告を行う。

当初の研究計画では、2011年度中に浸水マップを完成させ、現地での報告会の開催や浸水マップの現地での公開・配布、それを基にした地域社会での活用方法の検討を行う予定であった。しかし、浸水マップ自体は調査の進行と共に完成に近づいたものの、現地での活用方法の検討にまで入ることはできなかった。理由の1つは、単純に時間と予算の制約からであるが、もう一つより重要な理由として、各戸への聞き取り調査に基づいた浸水マップは、それだけ正確であると共に、情報が正確・緻密になるほど、そこには個人情報が含まれることになり、安易に公表しにくいという問題が出てきたからである。

よって、その問題にも留意しながら、現地での試行的な報告会を、年度が変わっての2012年5月12日ようやく実施するに至った。この報告会の詳細については、最後の5節で改めて述べることにする。また活動記録表には記載していないが、大学院総合政策研究科主催のリサーチコンソーシアム（2012年5月25日開催）のセッション「東日本大震災における総合政策学部・研究科の活動報告会」においても、「気仙沼大島における浸水マップづくりと地域社会への還元」と題して、一連の調査活動の報告を行った。

3. 各回の支援・調査活動に参加した 人たちからの報告・感想

2011年5月初頭の教員調査チーム訪問で、大島の民宿「アインスくりこ」にわれわれ訪問チームの受入れ（宿泊）をお願いし、6月からひと月1回の訪問を目指すことになった。実は民宿「くりこ」も、高台に位置しているものの、1階半分ほどの高さまで浸水して被害を受けたため、営業を停止せざるを得ない状況であった。被災しなかった2階の部屋を使わせてもらったものの、営業停止で宿泊代金をとることもできないため、客としてではなく友人・知人として宿泊させていただいた。つまり、炊事や掃除もお手伝いさせてもらいながら、食事の実費代金程度で泊めてもらうご好意に甘えたのである⁴。

以下、毎回の訪問チームの中から基本的に教員・学生各1名に報告および感想を寄稿してもらい、それを時系列に沿って掲載していく。活動内容と同時に、5～6月の震災後間もない現地の様子から、徐々に状況が変化していく様子をそこから窺い知ることができる。

浸水マップの調査に関しては、津波で被災した地区を中心に、床上や床下への浸水の被害を受けながらも、そこに留まり生活再開を目指している住民の方がいれば、各戸を回り津波による浸水や被害の状況について聞き取りを行った。流失した家屋や居住できない状態まで損壊した家屋については、目視による判定を行った。こうした形で毎回少しずつ調査エリアを変え、大島全島に渡って調査を広げていった。12月の教員のみでの調査では、歩いての訪問が不可能な縁辺・末端の地区とそれまでの調査で漏れていた地区について、車で移動しての調査を行い、全島での調査をひとまず

4 民宿「アインスくりこ」は、営業停止という状態で、われわれだけでなくボランティアの人たちを受入れていた。しかし、営業停止のまま何人も受け入れることには、なにかと限界や問題もあるため、その後、本格的な修繕工事に入るようになった。水道管を入れ替えるなど大がかりな工事で、2012年秋に営業再開を予定している。よって、われわれのチームも宿泊先を変える必要になったが、幸い夏から一部の宿泊施設がボランティア宿泊という形の営業を再開し、宿泊代金を支払った上での滞在に切り替えた。

訪問回	訪問日程	参加者数
第1回教員調査チーム	2011年5月3日～5月5日	教員4名
第1回教員・学生チーム	2011年5月31日～6月5日	教員3名+学生11名=14名
第2回教員・学生チーム	2011年6月30日～7月5日	教員4名+学生13名=17名
第3回教員・学生チーム	2011年8月3日～8月8日	教員2名+学生12名+三田祥雲館高校教員1名+高校生6名=21名
第4回教員・学生チーム	2011年8月16日～8月21日	教員4名+学生9名=13名
第5回教員・学生チーム	2011年10月6日～10月11日	教員3名+学生12名=15名
第6回教員・学生チーム	2011年11月2日～11月7日	教員3名+学生13名=16名
第2回教員調査チーム	2011年12月25日～12月28日	教員4名
現地報告会の準備	2012年4月28日～29日	教員2名
現地報告会の開催	2012年5月12日	教員3名

表注1 ここで教員とは基本的に共同研究のメンバーを指すが、それ以外の教員も2名含まれている。

表注2 第3回訪問では、兵庫ボランティアプラザの高大連携事業によるバス派遣を活用し、兵庫県立三田祥雲館高校の教員・学生にも参加してもらった。

表注3 第5回の訪問は、当初9月に計画をしていたが、台風が襲来したため直前にやむなくキャンセルした。

図表3：活動記録表(2011年5月～2012年5月)

完了した。

3-1. 第1回教員調査チーム訪問 (2011年5月3日～5月5日)

長谷川 計二 (総合政策学部教授)

「気仙沼で考えたこと」⁵

地震発生からほぼ2か月後の5月4・5日、気仙沼市、同大島、南三陸町を中心に、室崎・長峯・山田・長谷川の4名で訪問した。私自身は、それ以前にも松島町や石巻市、仙台市で炊き出し・泥かき等のボランティアに参加し、被災地の人々が恐ろしく困難な状況に置かれていること、ボランティアの人手や瓦礫撤去のための重機が決定的に不足していること、市役所等がさまざまな対応に追われて身動きできなくなっていること、手がつけ始められている場所とまったく手つかずの場所との落差の大きさなど、多くのしかも早急に解決されなければならない課題が山のように積みあがっていることに愕然としていた。

この訪問では、まず東北自動車道・泉パーキン

グエリアのボランティア・インフォメーションセンターに立ち寄った。各地から駆けつけてきたボランティアの人たちは、ここで被災地の状況や交通、ボランティアのニーズ等に関する情報を得て現地に向かうことができる。被災地に向かう結節点にこのような中間支援のためのセンターが設置されたことの意義は大きい。私たちも、このセンターで現地の情報を得て気仙沼市へ向かった。

気仙沼市では、津波と火災の両方の被害を受けた鹿折地区に降り立ち、被災状況を改めて確認した後、松岩地区面瀬中学校避難所を尋ねた。この避難所では、避難所運営に関する専門知識を持ったボランティアが活動しており、避難所内が近隣ごとに整然と区分けされ、またトイレ等の衛生も保たれていた。しばらくは避難所で暮らさざるを得ない地域住民にとって、こうした経験豊富な専門家が常駐していることは心強い。

気仙沼市大島では、大島中学校と民宿「アインスくりこ」を訪問した。学校自体は高台にあり大きな被害を受けなかったが、グラウンドは仮設住宅のための用地として使われていた。そのため、子どもたちの保護者が島内の別のグラウンドを自力

5 以下の報告は、山田孝子教授による2011年5月7日付の記事(「気仙沼訪問の報告」総合政策学部HP「震災支援」<http://kg-sps.jp/blogs/shinsai-shien/2011/05/>)を下敷きにして長谷川の若干の感想等を書き加えたものである。

で復旧させたということであった。大島の人たちの「自分たちでともかくなんとかしよう」という気概に感銘を受けると共に、学生がボランティアとしてお手伝いできることも少なくないし、またそれを期待されてもいると感じた。まずは「やれること」をボランティアも含めた「やれる人たちが」集まってやるしかない。待っていては何も進まない、というのが大島訪問の率直な感想である。

翌日は気仙沼市役所の菅原市長、岡本製氷の岡本社長を訪問し、気仙沼市の復旧・復興について話を伺った。気仙沼市の基幹産業はいうまでもなく水産業であるが、それを支える市場・製氷・冷蔵・トロ箱等の資材、水産加工・漁船の燃料、エサ、電機、通信等がほとんど壊滅している状況であり、さらに地盤沈下による浸水がひどく復旧の大きな足かせになっているという。これにさらに復興計画の遅れが重なることで、復旧の先行きが見えない状況にあった。

水産業には、たとえば6月はカツオの水揚げといった時期的な要因が付随する。ある時期を逃してしまえば、場合によっては1年先まで収入が得られないといったことが起こり得る。その間にこれまでの顧客が他の市場に移動してしまえば、その顧客が再び戻ってくる保証はないのであり、復旧の見通しが描けない状況をいかに早く抜け出すかが当市にとって喫緊の課題である。これは私見に過ぎないが、まずは元の形に戻したうえで、少しずつ手直しをしていくことが必要ではないか。これは、元の形に戻したものをその後壊して新しいものを造るということであるから、元に戻す分はムダ金になるが、それは必要なムダ金ではないかと思う。

帰路は、気仙沼市から海沿いを南下し南三陸町に至る。その後、女川を抜けて石巻を通るつもりであったが、道路が所々で寸断されており女川経由はかなわなかった。途中で見た風景は、「何もない、すべて流されてしまった」と息を飲むもの

であった。この風景はマスコミ等で盛んに報道されているので、多くの方もご存じだとは思いますが、それを実際に目の前で見ると言葉さえも出ない。こんなに高いところまで、こんなに奥の方まで津波によって破壊されてしまったのか、その途方もないスケールにただ立ちつくすだけであった。遺体捜索にあたる自衛隊・警察官の列、もくもくと後片付けをする人たちの姿、その苦悩はいかばかりか。人手と重機が圧倒的に不足している状況は、未だ変わっていない。

その後も何度か東北の被災地を訪問したが、5月の時点と比べれば市街地はかなりきれいになったようである。しかし、復旧と呼べる状況にはまだまだ遠い。なすべきこと、なされるべきことはあまりに多く残されている。



写真5：大島・浦の浜の港



写真6：大島・浦の浜に打ち上げられた汽船



写真7：大島・浦の浜の商店街があった場所



写真8：大島で被害の大きかった田尻地区

3-2. 第1回教員・学生チーム訪問（2011年5月31日～6月5日）

亀田 啓悟（総合政策学部准教授）

教員調査隊からの報告を受け、長峯・客野・亀田の教員3名と学生11名からなるチームは、5月31日から6月5日にかけて現地活動を行った。当時、気仙沼大島では米軍により道路と港湾周辺の瓦礫が片付けられていたものの、その瓦礫が港湾奥に渦高く積み上げられ、その脇には大島汽船のフェリーが座礁している状況であった。田畑の瓦礫は手つかずの状況であり、日常生活を取り戻すにはなお相当の時間が必要であるように感じられた。

以下、活動の概略を整理してみる。

<行程>

- | | |
|---------|--|
| 5月31日夜 | 大阪を高速バスにて出発 |
| 6月1日朝 | 仙台駅到着 ⇒ 気仙沼行き高速バスに乗り換え ⇒ 気仙沼市役所前着 ⇒ (昼食) ⇒ 大島汽船乗船 ⇒ 気仙沼大島着 ⇒ 活動 ⇒ 民宿「くりこ」泊 |
| 6月2日～4日 | 支援・調査活動 |
| 6月4日午後 | 気仙沼大島発、上記の逆順路にて帰阪 |
| 6月5日朝 | 大阪着、解散 |

<6月1日の活動から>

気仙沼市役所大島支所にてヒアリング

ヒアリング結果はおおよそ以下の5点にまとめられる。①大島の被災者は「大島開発総合センター」を1次避難所、島内7か所の旅館・民宿を2次避難所として避難生活を送っていること、②仮設住宅が近々完成するということ、③津波直後に亀山（島内の山）が火事になったこと、④重機により壊れた家の撤去作業がかなり進んだが、細かなもの残っていること、⑤田畑の中にはまだ瓦礫が散乱しており、夏場に向け蚊やハエが心配である。

また、大島の産業は観光と養殖漁業が主たる産業で、観光資源は食と景色であり、これまで体験学習で一万人ぐらいは訪れたであろうことを伺った。そして、港が壊滅して再開できる見通しが立たないこと、安価な宿泊付きボランティアツアーを実施できないか検討中であること、海の水質調査がいろいろ行われているが、カツオ漁への放射能汚染の影響が心配である、といったことも伺った。

大島中学校にて校長・教頭へヒアリング

ボランティア・ニーズについて伺ったところ、被災状況、避難直後に困ったこと、現在の生活で

困っていること、ボランティアに対して何を望むか、といった点を、住民や被災者に対して直接に聞き取り調査をしてはどうか、と提案された。

<6月2日の活動から>

島内を回り住民へヒアリング

70歳の男性から

地震による家への被害はなく、両親を連れ高台へ避難した。しかしより下方にある家が浮き始めたためさらに高台へ避難した。津波が自宅を破壊するところは見ていない。奥さんは孫の世話で気仙沼市内にいたため、5日間連絡が取れなかった。家は全壊したため、今後、同じ場所に住むかどうかは分からない。何もしていないと不安になるので、とりあえず片づけをしているが、この先については未定で、まだ考えられる状況にはない。大島フェリーの乗船代が無料にならないかと要望している。

60-70代の女性から

自宅は無事であった。特にボランティアへ頼みたいことはないが、敷地の角にある流木等だけでも取り除いて欲しい。(この後、流木の撤去作業を行った。)

80代の男性から

島内の老人会会長をしている。今すぐに何か頼みたいということは思いつかないが、周囲に聞いてみる。(その後、小山さん宅へのボランティア支援を紹介される。)

港のENEOSの従業員(男性:50代)から

気仙沼本土から通勤しており、大島で被災した。自宅も壊滅で、ガソリンスタンドも壊れているのでやることはないが、とりあえず避難所から通っている。ボランティア活動としては、全壊はしていないが水が入ってしまった家の水かきや泥かきをしてはどうか。

大島汽船の船員(男性:40代)から

自宅は気仙沼市内で無事であった。ボランティアに頼むことは余りないのではないかと。それより

も仕事がないとお金が続かない。

田尻地区の2人の女性(年齢は70代と推測)から

一人の方は、自宅は無事で、ボランティアに特に頼むことはない。もう一人の方は、田んぼに残っている瓦礫をどうするのが心配だ。私有地だし行政は来ないし……。

<2日間の所感>

ヒアリングをしてボランティアのニーズを聞いて回ったが、その場ですぐに対応できず、ニーズだけを聞く調査の難しさを感じた。現時点でのニーズを聞いても、おそらく次に来るときには状況が変わっている可能性が高い。多くの回答は「ボランティアに来てもらう必要はない」「田畑に残る瓦礫をどうにかしてほしいが、他人の土地だからどうにもできない」といったものであった。結局のところ、行政に依頼しないと、どうにもできないのかもしれない。

大島中学校の教頭先生から自分たちの仕事へのニーズを聞き取ることを提案されたが、その意図は、「家屋損壊や被災者の状況調査、震災直後に必要だったこと等を、時系列的に調査し記録していくこと」にあったことを、2回目に行ったときに理解した。こうした記録が、今後の教訓に生きるはずだということである。

なおこの日は、被災の酷かった田尻地区を中心にヒアリング調査をしながら回ったが、3か月が経過しても瓦礫などがほとんど手付かずの状態であることを再認識することができた。

<6月3日の活動から>

前日の聞き取り調査の中から出てきた小山さん宅のボランティア活動に7名で出かけた。宿からやや距離があったため、車で送迎していただいた。竹藪の中の伐採竹の搬出、倒れた竹の伐採、アルバム拭き、水田であったところの瓦礫片付け、トタン屋根の整理といった諸々の作業を行った。気温がかなり上がり、自分自身を含めて多くの学生が暑さで疲弊し、頭痛も感じた。軽い脱水

症状になった可能性もあり、夏に向けての対策の必要性を体感した。

＜6月4日の活動から＞

最終日であるが、午前中のみ、前日に続いて小山さん宅の作業を8名で行った。水の溜まった田んぼの瓦礫片付け作業で、やはり暑さで疲弊した。帰る前にシャワーが欲しかったが、水で体を拭いて済ませた。

＜活動終了時の所感＞

支援活動の継続性について

ボランティアに対する行政側の対応が悪いという批判をしばしば耳にした。ボランティアを派遣して欲しいと行政に言っても何も対応してくれない、ボランティアへの需要があるにも関わらず、行政がその受け入れに消極的だといった声である。しかしその結果として、気仙沼市のボランティアセンターや大島出張所を通した形でなくともボランティア活動を行うことは可能な状況にある。また今回行った活動で完了した仕事はほとんどない。したがって、「芋づる式」に潜在需要を発掘することで支援活動を継続することは可能であろう。

今後、何を行えばよいか

一つは、がれき撤去活動の継続である。二つ目は、被災者の調査である。3日夜に大島中学校教頭先生と再度談話をした際に、「今回の震源地は三陸沖地震が予想されていた場所と異なる。つまり、近い将来、再び三陸沖地震が来る可能性があり、その時の準備にも今回の経緯をまとめておく必要がある」と言っていた。よって、現在の状況というより、地震が発生して以降の対応と状況の変化をまとめておくことの意味があるということである。

三つ目に、家屋の損壊調査である。初日に大島中学校の教頭先生とお会いした際に、行政が作成した人工衛星データを基にした浸水マップや被災状況は、実際と異なっていると言っていた。そし

てその違いは、実際にヒアリング調査をしてみることで確認することができた。すなわち、実際に現地を調査しない限り、正確な情報・データは得られないということである。

今後、何ができるか

一つに、井戸水およびその水質の調査をしてはどうかということである。震災による断水後、住民たちは使える井戸を探し回っており、今後のために、使える井戸の場所、あるいは手入れをしておくべき井戸の場所を把握した井戸マップを作成しておきたいということであった。

二つ目に、ネット接続の補助作業を行うことも必要かつ可能かもしれない。従来、大島では、ADSLの通信速度が極端に遅かったため、インターネットはケーブルテレビに依存していた。しかし現在、そのテレビ局が壊滅状態にある。よって、無線通信が必要となるが、NTTdocomoは通信量に基づく利用制限を行っており、e-mobileは全島をカバーしている。AU系のWIMAXに関する詳細は分からないが、やはり一部の地域をカバーしていないようである。一方、われわれはb-mobile（日本通信）を持参したが、利用上の障害はなかった。

以上のように大島の通信環境は複雑であり、通信業者任せにしていた観光業者のHPは震災後全く更新されていない状況にある。何らかの解決手段を提供できるならば、その貢献は大きいと考えられる。さらに、われわれの専門能力を活かすのであれば、地域振興策の提案、また環境面では、植林や海洋水質の調査といったことも実現可能であろう。

さいごに－今後の課題－

教員が、ボランティア活動（世間話を含む）の調整を行いつつ、直接にボランティア活動自体も行うことは、肉体的にもかなり大変であろう。また活動内容はやはり男子学生向けの作業が中心であり、女子学生向けの作業も探し、ヒアリング調

査を組み合わせることが必要であろう。

そして、夏に向けて暑さ対策を十分にとることを繰り返しておく。

震災の混乱がまだ続いていた当時、多くのボランティアはバスの車中や持参した寝袋で夜を明かしていた。これに対してわれわれは教員調査隊の努力もあって、畳の上（布団）で体を休めることができた。これは大きなことであって、宿泊を受け入れてくれた民宿「くりこ」の皆様には心より感謝を申し上げたい。また学生諸君は、ボランティア活動後の疲れた状況にあっても厨房に入り食事の準備等をしてくれた。彼らの元気と明るさは、当地の方々にも希望と勇気を与えていたと思う。ここに敬意を表したい。



写真9：余りの光景に立ち尽くす学生たち



写真10：瓦礫・ゴミを分別する作業



写真11：民宿「くりこ」の床下に溜まった泥水の掃除

客野 尚志（総合政策学部准教授）

何かできることはないか。これが、都市計画を学んできた人間として、まず感じた思いであった。震災後二ヶ月が経って、気仙沼市大島に入った。二ヶ月経っても、震災で発生した瓦礫はほぼ手つかずのところも多く、いくつかの場所では、津波の爪痕を生々しく感じさせられた。われわれができることは、微力であろうが、少しでも地域の復興に貢献したいということが、当初から今まで続く思いである。

われわれ総合政策学部のチームは、泥だしや砂浜の掃除のボランティアと被災状況の調査を同時進行で行った。泥だしは地域の人々の産業の復活のため、砂浜掃除は地域の観光資源の一つである砂浜の再生を願って行っているものである。被災状況調査は、当時の被災状況についての正確な記録を残し、将来の地域計画や防災計画などに使用できる基礎的な資料に役立ててもらえれば、という気持ちから実施している。この成果は、地理情報システムなどを用いて見やすく整理し、さまざまな形で地域に提供していくことを考えている。

大島には、本土との間の架橋の計画もあり、また防潮堤の設置も議論の俎上に挙がっているという。今後、地域の環境も大きく変化するかもし

れない。今の大島の状況をしっかりと把握した上で、将来のビジョンを描き、これらのことをどのようにむかえるのかしっかりと考えていく必要があるだろう。今後、そうした局面においても何か貢献できることが出てくるかもしれない。それに備えて次なる活動内容を考えていきたい。

杉浦 仁俊（総合政策学部2年）
「被災地へ行って感じたこと」

2011年3月11日に起きた東日本大震災が日本を大きく揺るがしたことは、現在に至っても、多くの人の記憶に生々しく残っている。この大震災は日本経済を混乱させ、人々の生活を大きく変化させた。とくに被災地には大きな爪痕が残り、これが消えることはない。その被災地に私が足を運んだのは、2011年6月上旬のことだ。この時、私が現地で感じたことを以下に綴る。

5月中旬、私の所属するゼミの中から数人が、宮城県気仙沼市大島へボランティア活動をしに行くことが決定した。他のゼミからの参加者も合流し、先遣隊として総勢十数人で被災地へ行くことになった。それから6月上旬までの間、現地へ向かう準備等を行い、出発当日を迎えた。

初日、移動に大半の時間が費やされたため、現地に到着した時刻は昼を過ぎていた。現地到着後、大島中学校やボランティアセンターを訪問し、宿泊先へ移動した。現地の視察を行ったのは、その後である。もちろん、現地へ行く道中でも震災の悲惨さを目の当たりにしていたが、この視察でいくつかの問題点を私は発見した。まず、大島の港にある瓦礫の山の分別作業には、多大な時間がかかる可能性である。これは、瓦礫の多さに対して、それを分別する人の数がきわめて少ないからだ。さらに、中学校では、子供たちの心のケアの問題が指摘されていた。カウンセラーの人手が足りないという問題をどのように解決すべき

かが問われていた。

2日目、私たちは瓦礫分別班と聞き取り調査班とに分かれて行動した。私は瓦礫分別班に配属され、一日中瓦礫の撤去やその分別に従事した。これは想像以上の肉体労働であり、危険を伴うものであった。一日の作業が終わると、聞き取り調査班から地元の人たちの思いや考えていることを聞いた。

3日目、私は1日目と2日目に感じた問題点を再認識することができ、そのような問題をどのように解決すべきなのかを考えながら活動を行った。

以上のボランティア活動から、私は現地の人々の考えや状況を肌で感じることができ、貴重な経験をすることができた。再び被災地へ赴き現地の人々の要望に応えられるように、これからも活動を続けていくことを決心した。

3-3. 第2回教員・学生チーム訪問（2011年6月30日～7月5日）

小池 洋次（総合政策学部教授）

自分のゼミ生4人と共に第2回の訪問支援活動に参加した。私自身は、授業等のスケジュール上、訪問チームの後を追う形で7月4日から1泊2日で現地入りした。短い滞在ではあったが、多くのことを感じ学んだように思う。学生たちの活動の詳細は別稿を参照いただきたい。私が被災地に入るのは石巻、陸前高田に次いで3度目であった。気仙沼大島で感じたことを3つに絞って記しておこう。

第1に、他の地域でも同じだが、被害の大きさと復興の難しさを挙げなければならない。例えば、学生が瓦礫片付けを行った海岸である。もともと、この地域有数の海水浴場だったと言うが、瓦礫（家屋や生活用品をこう呼ぶのは抵抗があるのだが）はそう簡単に撤去できないことは明らかだった。海の中での撤去作業も考えると気の遠く

なるような話である。海水浴場や漁業がそう簡単に元に戻るとは思えなかった。70歳の漁師の話では、かつて150人いた仲間のうち、いま再挑戦しようという人はわずかに10人。若者たちは無力感を感じているという。これが現実だ。

それでも、何とか前進させようと努力している人々が、地元にもボランティアにも決して少なくないことに勇気づけられた。小さな一歩でも、継続すれば長い距離になる。お世話になった宿「アインスクリコ」には、愛知県や岩手県からのボランティアも滞在していた。

第2に、被災地に入り、自分で感じ取ることの重要性である。テレビで見て新聞で読むだけでは、分からないことがあまりにも多いのである。例えば、人々の表情や感情の起伏、その場の空気や臭いなどである。対面で人の話を聞けば、テレビでインタビューを見聞きするよりはるかに多くの情報を得ることができるであろう。

第3に、ボランティアに参加した学生たちの学びについてである。学生たちは泥だらけになりながらも、実に生き生きとした表情をしていた。ボランティア活動での達成感は、キャンパスでは決して得られないことであろう。他のボランティアでも感じたことだが、労働を提供する人々は同時に学び、それによって多くを得ているのである。

できるだけ多くの学生諸君がこの大島を訪れることを望みたい。その経験をキャンパスや家庭で他の人々と共有することによって、支援の輪はさらに広がるはずだ。



写真12：大島・小田の浜海岸の掃除



写真13：道端で住民の方々へ聞き取り調査

新屋 司（総合政策学部4年）

「東北の気仙沼市へのボランティアに参加する人はいませんか。」2011年夏、ゼミの帰り際に告知があった。その頃はまだ震災発生から4ヶ月程しか経っておらず、テレビによる報道やネットの情報による知識しかない私に、現地に行くことはある程度の危険が伴うことを予感させた。しかし、現地へ行けば何か自分に出来ることもあるはずという思いから、大島支援プロジェクトに参加することを決意した。6月30日～7月5日まで、車中泊

を含む弾丸スケジュールの中、私にとって人生初のボランティア活動が始まった。

仙台へ到着した時の印象は「なんの変哲もない都会」というものであった。ほんの4ヶ月の間で東北の主要都市である仙台市は、その機能の主要部分を回復させていた。その時、私の胸には、実は結構支援が進んでいて現地ではあまりやることがないのでは、という疑問が浮かんでいた。しかし、その疑問は気仙沼市へ到着した瞬間にかき消されることになった。一見すると普通の町並みに見えた住宅街、しかし角を1つ曲がると津波の被害を受けた家が連なり、瓦礫の山ができていたという光景が当たり前のように広がっていた。たった一本通りが違うだけで、家を失った人とそうでない人がきっぱりと分れる現状を見て、初めて津波の恐怖を肌で感じた。

現地での活動は大きく3つに分かれていた。一つはお世話になる民宿「くりこ」の床下の掃除・泥だし、もう一つは浸水マップの調査と海岸掃除、そして小山さん宅の田畑の瓦礫撤去。この3つの仕事に分担して当たった。まず私は民宿の床下掃除を担当することとなった。厨房の床下に潜りこみ、津波によって流れ込んだ泥や瓦礫を撤去していった。普通では考えられないような木片や金属片が家屋の床下にまで流れこんできていた。大学生3人がかりで半日働き続けても作業は終了しなかった。たった一つの家の床下掃除だけでもすべてを撤去するには相当な時間と労力が必要になる。大島全体で考えても同じような問題を抱えた民宿や民家がいくつも存在するはずだ。現地の人だけで人出が足りるはずがない。民家や民宿の床下にある瓦礫の話などは、関西で見ていた報道番組では分からないことである。日本全体から見れば小さな問題かもしれないが、このような問題が、被災者個人にとっては死活問題であるということを実地で作業から痛感した。被災地に実際に赴くこととテレビで被災地を見守ることの間に

は、とてつもないギャップが存在した。

現地へ行って初めて発見したことはもう一つある。それは現地の人たちの生きる活力と暖かさである。お世話になった民宿のお女将さんやご主人、そして瓦礫の撤去をお手伝いした小山さん、ボランティアを通して関わった方々は、みな大島に誇りを持ち、震災で傷ついた自分たちの地元を甦らせることを諦めていなかった。「この畑をもう一度作り直すには最低でも10年はかかる。でも私はお父さんと二人でもう一回この畑をやるつもりだから」と小山さんは力強く話してくれた。私たちよりもはるかに高齢の方が10年先までを見据えていたことに本当に驚き感動した。その言葉には力強い意志が宿っていた。

現地の人たちが抱える問題や心の傷は、現地を一度訪れただけでは計りしれず、ましてやテレビの報道などからでは推し量れないだろう。たった一度ではあるが、実際に現地へ行ったことで私は確信することができた。学生は遠くから眺めるだけではなく、一度でよいから現地へ行ってみるべきである。現地へ行って現地の方と触れ合い、自分の感情と感覚で被災地の現状を感じてきて欲しい。そこから得られるものは、大学のキャンパスにもインターネットにも存在しない。生きた知識と生きた経験がそこにはある。私自身大学生活も残すところあと1年である。学生のうちに最低でももう一度、東北地方に足を運ぶつもりである。

3-4. 第3回教員・学生チーム訪問（2011年8月3日～8月8日）

このときは、兵庫ボランタリィプラザの高大連携事業によるバス派遣を活用し、キャンパスが隣接する兵庫県立三田祥雲館高校の教員1名と生徒6名にも参加してもらった。実は、三田祥雲館高校では、PTAの働きかけもあり、宮城県立気仙沼高校に要らなくなった自転車を修理して、100台

を寄贈するという活動をしていた。偶然にも同じ気仙沼市への支援活動をしている縁もあり、募集期間が短かったにもかかわらず、高大連携事業への参加呼びかけに快く応じてくれた。高校生たちも事前に大島のことを調べてくるなど、大学生に劣らず活動してくれた。

この回は、初めて民間の夜行バスではなく、貸切バスを利用した訪問であった。行程を弾力的に決められることから、気仙沼市では、到着後まず気仙沼高校を訪問し、高校生同士による交流活動を行った。神戸三田キャンパスの放置自転車等持ち主の現れなかった自転車を7台譲り受け、貸切バスのトランクルームに詰め込み、大島まで運び込んだ。それまでの2回の大島での活動から、現地での移動手段に悩まされ、大島内に自分たちの自転車を置いておくことを考えたのである。

もう一つ、この回には、被災地支援を目的に結成された学生団体「笑顔の「わ」プロジェクト」のメンバーが参加した。大島小学校体育館を会場に、現地の子供たちを対象に「七夕まつり」を行うためである。第1・2回の訪問にも、メンバーから1人、2人と参加し、準備してきた企画を実現にこぎ着けた。

最後に、今回から、第1・2回とお世話になった民宿「アインスくりこ」から、正規の営業としてボランティア宿泊を始めていた民宿にお世話になることにした。「くりこ」は正規の営業開始に向けて、本格的な修繕工事に入るということであった。この回にお世話になったのは、民宿「海鳳（かいほう）」というところで、大島に持ち込んだ自転車もこの民宿に置いてもらうことになり、この民宿には、その後も頻繁にお世話になることになった。

とにかく、8月の第3回の訪問は、現地の状況を含めて一つの転機になったと言える。

今井 一郎（総合政策学部教授）

「気仙沼・大島の印象」

2011年8月3日の夜行バスで出発し、4日より7日まで大島を訪れた。今回は本学部から教員2名（長峯・今井）、学生12名と三田祥雲館高校から教諭1名（池田先生）と生徒6名が参加した。三田祥雲館高校のチームは気仙沼高校との交流を実施し、本学部学生は大島の小山さん宅周囲の清掃作業および三田祥雲館高生徒らと共同で砂浜の清掃作業と浸水マップ調査に従事した。また7日には、気仙沼大島小学校の体育館およびグラウンドを会場に七夕イベントを実施した。イベントの実施内容については学生からの報告に譲る。

私たちが訪れた時期は震災から約5ヶ月が経過して、各方面で復旧作業が進行していたためか、人びとの表情にはある程度の落ち着きが感じられた。それは、学生たちが企画した大島小学校での七夕イベントに参加した人たちの立ち居振る舞いを見ても感じられた。最終日に実施した浸水マップ作成のための住民聞き取り調査で訪問したお宅で私たちに應對して下さった方々の物腰や顔つきも、一様に穏やかであった。私には、人びとが大震災という激しいショックから一定の期間が過ぎて、ある程度冷静に現状をとらえ始めているようにも感じられた。復旧作業が各所で進んでいるものの、被災状態が日常化したまま淡々と生活せざるを得ないのが現実なのかもしれない。

もう一つ印象に残ったのは、大島を取り巻く自然環境の激しい傷み方であった。大震災直後から進められた瓦礫類の撤去作業によってかなりの程度片づけられたとのことであるが、砂浜にはまだ至る所に瓦礫や漂流物等が残置されたままであった。また、観光スポットにもなっていたという海岸の松原や鳴き砂の「十八鳴浜（くぐなりはま）」も巨大な岩石が打ち寄せられて荒廃したままであった。これらは、植生の生態的遷移に任せて

おけば元の風景に戻っていく可能性もある。しかし、その土地が今後数百年間にわたって放置されそのまま置かれるという保証はどこにも無い。地元の方たちが大島を復興するために観光業を手段の一つとして利用するならば、松原と砂浜の再生に向けて真剣に取り組む必要が出てくるように思われた。自然環境の整備は漁業にとっても良い効果をもたらすはずである。海水に浸かった農地も含めて、気仙沼大島の自然・環境の復旧作業計画を早期に立案し実行に移すことが喫緊の課題であると感じた。



写真14：三田祥雲館高校と気仙沼高校の交流会



写真15：七夕祭りで大島の子供たちと一緒に



写真16：道端で住民の方々へ聞き取り調査

川崎 緑

(総合政策学部3年、笑顔の「わ」プロジェクト代表)

私たちの団体は、気仙沼大島支援プロジェクトに参加することを通じて、8月3日～8日の夏休みの期間に心のケアに重点を置いたボランティア活動を現地で行って来ました。今回の訪問メンバーは、全体で、教授・先生方3名、総合政策学部の3年生12名、三田祥雲館高校の1・2年生6名の計21名です。主な活動内容は以下の通りです。

- ・ 大島小学校での七夕まつり（注：東北では旧暦で七夕まつりをします。）
- ・ 気仙沼高校生との交流会（三田祥雲館高校の皆さんが企画・進行を行いました。）
- ・ 気仙沼市内被災地の視察
- ・ 大島の海岸清掃、瓦礫片付け、浸水マップ作成の聞き取り調査、仮設住宅の訪問

8月時点の気仙沼は、震災後約5ヵ月が過ぎているにもかかわらず、深刻な状態が続いていました。気仙沼市の港湾近くでは大きな電柱が倒れており、家には赤のスプレーで危険を表わすマークが付けられていました。また大島では、船が海岸から何十メートルも陸に上がり、丘かと思うほど大きな車の山もありました。

「大島が普通の島に戻ってほしい。」小学生が短冊に書いてくれた言葉です。大島小学校で行った

七夕まつりには、たくさんの子供たちが参加してくれました。短冊を書いたり、スーパーボールすくいをしたり、その他にもサッカーやフルーツバスケットなど、時間の許す限り皆で思いっきり遊びました。遊んだ後に、子どもたちが「すごく楽しかった、また来て!」と言ってくれた言葉が強く心に残りました。

海岸清掃では、小田の浜という「快水浴場百選」⁶で全国第2位にも選ばれている美しい景観を持つ（持っていた）浜を掃除しました。8月時点での小田の浜には、津波の影響で砂浜にペットボトルや発泡スチロールなどの軽量のごみが散在しており、砂浜の中には船の先端や巨大な木の板・冷蔵庫の扉といった粗大ごみが多く埋もれていました。

今回のボランティア活動を経験する中で感じたことは、第一に、行政と島の人たちとの連携が上手くいっていないということです。島の復興は、行政の力だけでも島民の力だけでも足りず、お互いの信頼関係と連携によって成り立つものだと思うからです。第二に、大島の人たちの力強さです。子どもからお年寄りの方まで、大島の方々は未曾有の災害に遭ったにもかかわらず、復興に向けてたくましく毎日を送っておられました。そこに大島の人々の繋がりやの深さと底力を感じました。

一日も早く島が復興し、大島に美しい景観と島の活気が戻ることを願っています。

3-5. 第4回教員・学生チーム訪問（2011年8月16日～8月21日）

室崎 益輝（総合政策学部教授）
「浸水被害調査に参加して」

や映像を見ただけではよくわからない。被災地に行ってみて、その津波の恐ろしさは体感できる。それも見るだけではなく、体験者の話を聞いてこそ、リアルに理解することができる。私は、気仙沼大島での津波の浸水調査に、短期間であったが従事させていただいて、現場で被災者と語り合うことの大切さを改めて教えられた。

津波が、大きなエネルギーをもった運動体として根こそぎすべてを破壊尽くすものであること、狭隘な谷あいや高速の自動車並みのスピードで駆け上がり沖から離れた高台まで這い上がること、地形のちょっとした違いで津波の高さも破壊力も違うことなど、多くのことを学んだ。自然というものに侮ってはいけないと思うと同時に、どう自然と向き合えばよいのかを、いろいろ考えさせられた。

ところで、津波浸水調査の効用は、自然と向き合えたことだけではない。被災者と向き合えたことも、私にとっては大きな収穫であり学びであった。関西と東北、その文化の違いは、そう簡単に埋めることができない。その隙間は、心を割ったコミュニケーションが埋めてくれるのだが、大きな傷を負った被災者に声をかける術がない。被災者に心をかけることができなくて悶々としていたところに、この調査への参加を求められた。

ところが、浸水被害の調査は、この垣根をいとも簡単に取り払ってくれた。「どこまで津波が来たのですか」という私の問いかけに、懇切丁寧に津波の状況を話していただけただけでなく、さらに当時の周りの人の避難の状況や現在の心境などを率直に話していただけた。一人一人の思いが、私の心に突き刺さった。50万人の被災者には、それぞれの体験がありそれぞれの思いのあることを知らされた。被災者の傷の深さを知る上でも、貴重な調査であった。

津波の破壊力の凄さやその拡大の速さは、写真

6 環境省が、2006年に全国の海水浴場を「美しい」「清らか」「安らげる」「優しい」「豊か」の5つの基準から評価し、全国100カ所を「快水浴場百選」として選定した。大島の小田の浜海水浴場は其中で第2位という高い評価を受けた。



写真17：大島・田中浜に積み上げられた瓦礫



写真20：大島・浦の浜で陸から降ろされる汽船



写真18：流されてきた木材やゴミの撤去作業



写真21：仮設住宅を訪ねて聞き取り調査



写真19：大島・浦の浜に積み上げられた瓦礫

大津 暢人

(総合政策研究科修士1年、神戸市消防局勤務)

気仙沼大島で私は2つのお土産をいただいた。2つとも言葉のお土産である。

一つ目は、お世話になっていた民宿「海鳳」の女将の言葉である。海辺にある菅原さんのお宅で瓦礫撤去をしていたところ、震度4の余震があった。逃げるか逃げまいか議論していた私たちを、海鳳の大将は民宿のバスですぐに迎えに来てくれた。高台にある民宿に戻り、逃げるか逃げまいか議論していたことを女将に話すと、女将はあっさり「訓練と思って逃げればいいのか」と笑った。この姿勢こそが、正常化の偏見を打ち破り、津波から生き残る最大の方策だと気づいた。近づく将来の

津波に備えて、神戸で津波防災教育をするときには必ずこの言葉を引用させていただいている。

二つ目は、津波で農地に残された家具などを撤出させていただいた小山さんの言葉である。雑談の中で、私が神戸での被災経験を話すと、小山さんは神戸を支援したことを話してくださった。17年前の神戸への思いをつづった自作短歌を見せ、小山さんは私に向かって続けた。「支援をありがとう。このご恩はすぐに忘れます。しかし、次の被災地となった場所を支援することで、私は恩返しをします」。私は感動して涙が止まらなかった。

大島での私の4日間の作業に比べると、頂いた二つのお土産はあまりに大きい。教訓を受け継ぎ、次の災害の死者を減らすことこそが真の供養であるとの思いを胸に、帰路の船に乗り込んだ。

3-6. 第5回教員・学生チーム訪問（2011年10月6日～10月11日）

この回に参加した学生は、教員として参加した山田教授の担当ゼミ学生が主体で、4人の学生に感想の執筆を依頼してくださったので、ここだけ4人の文章を掲載する。またこの回は、秋で季節がよかったこともあり、大島へも多数のボランティアが駆け付けた時期であった。ボランティア活動も他のグループと共同で行うという経験を持つことができた。

もう一つこの第5回では、新たに「十八鳴（くぐなり）荘」という民宿にお世話になった。この民宿の女将（おばあちゃん）にもまた、以下の各感想に出てくるように、いろいろとお世話になった。



写真22：鹿折地区に乗り上げられた大型漁船⁷

山田 孝子（総合政策学部教授）

「気仙沼大島ボランティア活動への想い」

長峯先生、上野先生、そして基礎演習やメディア工房の1、3、4年生11名の学生とともに10月6日～11日に気仙沼大島でボランティア活動に従事しました。震災から半年余り、大島でも瓦礫の片づけが進み、海岸沿いにはリフォームが終わり住人の戻った家屋もありました。とはいえ、船着き場から民宿までの緩い坂の両側には、まだ津波の痕跡も生々しい家屋がいくつも残っている状態でした。

ボランティア活動としては、7日は浸水マップ作成のための調査を島内の地区ごとに分担を決めて行い、海辺でワカメの加工場の復旧作業に取り組む方たちにいろいろと話を伺いました。二日目は、2つの作業班に別れ、一つは宿の向かいの旧家・小山さん宅の片づけ、もう一つは海岸沿いのホテルの片づけ作業に当たりました。海岸沿いのホテルは半年経ってなお潮水に浸かったままの重い衣服や事務書類などが散乱している状態で、学生たちはガラスや釘などに気を付けながら根気よく様々なものを運び出し、写真や伝票類などを丁寧に分ける仕事を夕方まで続けました。朝晩

⁷ 津波で破壊され流された石油タンクの重油に引火して火災になった鹿折地区では、海岸から1 kmほどのJR鹿折駅前まで大型漁船が流された。この漁船を撤去するか、残してこの辺りを震災メモリアル・パークにするかで論争になっている。被災された住民の方々は撤去を望んでいる。

は民宿「十八鳴」を一人で切り盛りする女将さんの食事支度や後片付けを交代で手伝いました。これは意外なことに、家事に手慣れた留学生在が男子学生ながら大活躍でした。こうした日常生活を共にすることで、学生の違った側面にハッとさせられることは、このボランティアの最中度々あり、大きな発見でした。

三日目は、上野先生の聞き取り調査に同行する学生2名を除き、全員が前日の続きです。小山さん宅の田んぼに入り、夏の間を生い茂った草を刈り取る作業に取り組みました。作業前に小山さんの好意で敷地の一部にある栗林で栗拾い、というちょっとした楽しみもありましたが、大半の時間をぬかるむ足場に苦勞しながら夏の間を生い茂った草にスコップとバケツで立ち向かうことに費やしました。津波で運ばれた砂泥に足をとられながら、1メートル程まで生い茂った草を取り払おうとしてスコップを砂に入れると、瓦やガラス、漢字の練習帳まで、いろいろなものが埋もれていました。ずっしりと重い泥だらけの草の入ったバケツを繰り返し田んぼから運び出すのはかなりハードな作業でした。1日目は学生たちだけでなかなかかどらず、広い田んぼのごく一部しか草取りができなかったのですが、2日目は各地からのボランティアが50人以上加わり、共同作業のスピードを実感しました。また、ボランティア同士の呼びかけで、地震が起こった午後2時46分に、海に向かって全員で並んで黙とうしたことも、忘れられない記憶です。当初は時間的にきりの良いところまで作業したら、早めに引き上げる予定でしたが、学生たちの側から「最後まで頑張りたい」という声があがり、結局最後まで頑張り通し、宿の入り口で裸足になり互いの泥だらけの長靴や足の汚れを流しあったことも、良い思い出です。

おそらく多くの学生にとって一番印象的だったのは、民宿を一人で切り盛りする女将さん（村上さん）や小山さんに夕食後に伺った話ではないか

と思います。特に宿の女将さんが震災の時、持って逃げることにした唯一の家財が愛用の津軽三味線だった、という話かもしれません。大島に嫁して来てから、さまざまに乗り越えてきた苦勞や、民宿の経営者としての大島の今後についての話は、素朴な語り口であっても、地元を思うからこそその現実的で冷静な言葉でした。そして、震災のときも主婦として家族の生活や食事の世話を続けた体験談は、学生たちにも生活に根差した人間のたくましさとして確かに伝わったと思います。

私たちは被災地支援という目的で気仙沼大島に赴いたのですが、帰宅後に学生が提出した感想に一樣に書いてあったのは、「支援に行ったつもりが、実際には自分たちが気仙沼大島で出会った方たちから与えられ、教えていただいたものの方が遥かに大きい」という内容でした。私も同感です。むしろ、気仙沼大島の方たちの前向きな姿勢や元気は、私たちがあまりにも遠い地からの他者ゆえの「気遣い」や「遠慮」によるものではなかったのだろうか、ということがずっと気がかりでした。本当のところは誰にもわからないかもしれません。しかし、空元気であったとしても、大島の方たちが元気に振る舞う小さな動機になったとしたら、それもボランティアのささやかな役割なのかもしれない、と今は考えています。この第5回のボランティア活動を通して、関わった私と学生たち全員にとり、気仙沼大島はずっと特別な場所であり、いつかまた訪ねるべき場所になったと感じています。

辻田 百合菜（総合政策学部1年）

私は、ゼミでの呼びかけにより10月6日～11日まで気仙沼大島震災ボランティアに参加させていただいた。往復のバスに2泊、民宿に3泊という5泊6日のツアーであった。作業日は10月7～9日の3日間。その時の活動や感じたことについて、日

程に順じて書いていきたい。

<10月7日(金)>

お昼頃、気仙沼に到着。家が吹き抜けになり、船が畑に放り出された街の姿に唾然としながら民宿へ向かう。きれいな民宿で、おいしいお弁当をいただいた後、班に分かれて浸水マップ作成のための調査をする。上野先生をリーダーとする私たちの班は、船着き場辺りを調査する予定だったが、あまりの強風により作業を断念。途中で気仙沼大島観光協会の事務所を通りかかり、『みちびき地蔵』の絵本を手に入れた。そこからの帰り際、民宿から少し登った墓地と光明寺を散歩。墓地には黒っぽい石を使用したお墓が多く、立派で新しいものばかりであった。民宿に戻り、絵本の解説。絵本で使用される「みちびく」という言葉がどのような意味を持つのか、少し疑問に思いながら作業終了。

<10月8日(土)>

2グループに分かれて作業。私は、長峯先生のグループ(計7名)で民宿近くの小山さん宅で作業。作業の内容は、津波によって海水を被った田んぼの泥だし・雑草抜きであった。土は水を含んでいるため重く、7ヵ月の間に育った雑草は根強く生えていた。7人で役割分担をして約6時間の作業をしたが、これといった変化はあまり見られなかった。

作業は夕方の16時半で終了し、小山さんの震災体験談を聞かせてもらった。その中で、当時の様子や小山さんの思いなどから学んだことも多くあった。特に実感したことは、被災された方にごく励まされたということだ。被災された苦しい状況にもかかわらず、私たちに強い心を持って生きることが強調された。本来なら、私たちが「頑張って生きていきましょう。もう一度頑張りましょう。」などの言葉をかけて、被災された方を励ますのかもしれない。だけど、私がそんな言葉をかける必要もなく、強くたくましく生きているこ

とが分かった。そして、私たちにもそのことを教えてくれた。どんな著名な学者に言われるよりも重みがあり、心に響く言葉であった。

<10月9日(日)>

この日は私たち関学生と他のボランティア約100名による作業であった。私は午前中、上野先生と浸水マップの調査を行うことになった。場所は小山さん宅から、そう遠くないところで、話を聞いていると、津波は約16mもの高さまで来たそうだ。この周辺に住んでいる人は、避難訓練を何度か行っていたらしく、津波が来たときも無事に避難できたようだ。また、この家の道路を挟んだ林には、みちびき地蔵がいたという有力情報も手に入れた。現在、地蔵は津波によって流され、新しく作り直している途中だそうだが、それは復興への大きなきっかけになるのではないかと思う。

午後からは小山さん宅の泥だし作業に参戦した。作業はあっという間に進み、100人という数の偉大さを改めて感じた。そして、復興にはまだまだボランティアの数を必要としているのだと感じた。作業は終了し民宿での最後の夜だった。民宿のおばあちゃんの震災体験談を聞かしてもらった。おばあちゃんは目や腰などに病気をもっているにもかかわらず、終始笑顔だった。そこでは、何事にもどんと構えること、そしてそれは女性の強みであることを学んだ。

<ボランティアを通しての反省と提案>

ボランティアを通して多くのことを学び感じた。それまでボランティアに対しては、震災の大きなダメージを受けているはずだからと、しんどくて暗いというイメージを持っていた。しかし、行ってみればその偏見は一扫され、みんなが力強く、明るく過ごしていた。今後の大島は復興出来るのだろうか。これは、夜のミーティングで何度も議論されたことだった。現在の大島では、船が流されたことによる漁業の停止、津波による海水浴場の危険性、橋をどこにかけるのか、などの問

題があると知った。しかし、ゆずや椿などの産地でもあり、みちびき地蔵という民話が存在する。それを利用して、岩手県の遠野のような、古きよき時代を演出できないだろうか。

大島で4日間過ごしてもう一つ気がついたことは、島の構造が把握しやすいことだ。小さな島だからある程度の方角を認識しやすいと感じた。その特性を生かして、大島コースを作り、その中に特産品を盛り込んでいけばどうだろうか。大島では若い人が減っており、まずは瓦礫や積み上げられた車を片付けることが先決だと思うが、どうか復興してほしい。今回ボランティアを経験して、本当に多くのことを学んだ。そして、総合政策学部の3名の教授と過ごしたことで、総合的な視点でものを考える過程も体感させてもらった。このような大きな機会を与えていただいたことに本当に感謝。ありがとうございました。



写真23：小山さん宅の田んぼの泥かきと草取り



写真24：大勢のボランティアと一緒に泥かき作業

黒住みのり（総合政策学部3年）

10月6～11日、東北の気仙沼大島という離島でボランティア活動に参加しました。ボランティア活動の1つは、田んぼの草抜きと泥かきでした。腰まで生えている草をスコップで掘り、海岸沿いの土手まで運びました。草を抜いた後は、泥（津波によって田んぼに溜まった泥土）をバケツやカゴに入れて土手まで運びました。この作業はかなりの体力を使い、作業が終わった後はみんなヘトヘトになっていました。田んぼの持ち主の小山さんの励ましがとても心強かったです。また、1日目は7人での作業だったのですが、2日目は他のボランティア団体の参加で、100人程の人が集まり、みるみる田んぼがきれいになっていき、とても感動しました。

2つ目の活動は、浸水マップ作成のための聞き取り調査でした。これは津波が来たときどこまで浸水したかを調査するもので、津波のときの詳しい話など生の声を聞くことができ貴重な経験になりました。もともと海岸沿いにはたくさんの松の木があったそうですが、何百本もある松のなかで生き残った松は2本だけだったそうです。また、小山さんや民宿のおばさんなどにも話をさせていただき、実際の体験を聴くことから学べるのがたくさんあることが分かりました。

写真22は、気仙沼市内に戻った後で長峯先生に連れて行ってもらった鹿折というところですが、震災の跡が生々しく残っている場所がまだ多くて胸が痛みました。

今回のボランティアを通して、私は本当に言葉では表せないくらいの経験をさせてもらいました。最初は現地の人を元気づけるために行くつもりでしたが、気がつけば自分の無力さや復興への長い道なりに落ち込んでいた私が、現地の人から励まされていました。私も、そしてできるだけ多くの人が、長期的にボランティアに行く必要があ

ると感じました。

高畑 陽平 (総合政策学部3年)

「人間ってやっぱりすごい」

今回の活動を通して私が一番感じたことは、「人間ってやっぱりすごい」ということでした。私が震災ボランティアに参加するのは2回目です。正直なところ、「震災から7か月経ったので少しはマシになっているだろう」と思っていたのですが、大島は津波に挟み撃ちにされる形になってしまい、家が丸々流された形跡や津波で流された家電や家具などが無造作に積まれている山々を見て、まだまだ完全復興は何十年も先になるかもしれないと感じました。しかし、現地入りして3日目の活動で畑の泥かきに行った時には、他のボランティア・チームやJTБのボランティア・ツアーで来た人たちと一緒に、総勢100人程の人たちが同じ気持ちで作業に取り組んでいる姿に、心から「人間ってやっぱりすごい」と感じました。

東日本大震災は今までない未曾有の自然災害で、完全復興するまでには何十年とかかるかもしれません。それでも、人間にはそのような災害にもくじけずに立ち上がるパワーがあるということ、今回のボランティア活動を通して改めて実感しました。建物や道路は時間が経てばきれいに元通りになります。しかし、今回の災害に遭われた方々の心の傷は一生かかっても治せないかもしれません。それでも、私たちの活動によって、少しでも傷を癒すことになればと信じています。私は、今回の活動を通して、元気を与えるつもりがそれ以上の元気と学びを逆に与えてもらいました。そのお礼に、将来、それ以上の元気と笑顔を必ず東北に届けたいと思います。

高田 直紀 (総合政策学部1年)

「気仙沼大島のボランティア」

バスの集合時間に間に合ったものの、誰もおらず集合場所を間違えたのか、という不安からこの旅は始まりました。あれだけの長時間、バスに乗ったのも初めてでした。気仙沼での光景は自分の中である程度予想していたものの、タクシーで船着き場に移動しながら、風景が自分の予想とだんだん異なるものになり、船着き場周辺では想像を超えたものになっていました。TVで見るのとは全然違う。正直これが同じ日本なのか、と思いました。

大島の民宿はとてもきれいで、食事もとてもおいしかったです。でも民宿の建物のすぐ下まで津波が来たと言ったときは、やっぱりとても大変だったのだなと思いました。一日目のヒアリング調査で何軒かの家を回りましたが、その周辺の風景ももの凄く、言葉にすることもできない程でした。一番印象に残ったのは林と海に挟まれている家の人の話でした。挟まれているから逃げ場がなく、家の二階にしか行くところがなく、目の前で車が流されていくそんな状況だったそうです。津波の来た跡が薄く線が残っていたのですが、家はある程度高いところにあるにもかかわらず、僕の首ぐらいの高さだったので、びっくりしました。震災があつて、それでもめげずに一から再興しようとしている志にとっても感動しました。

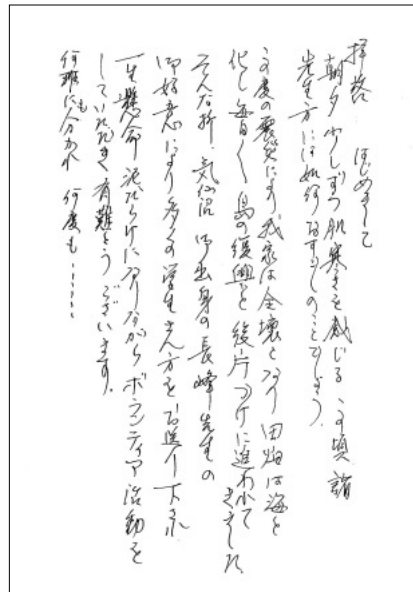
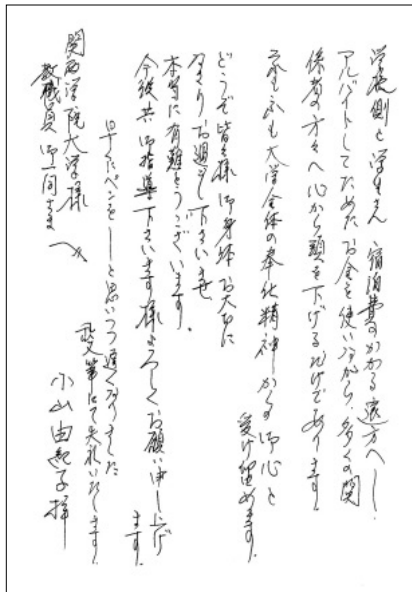
二日目は、海の近くの旅館で作業を行いました。海の近くということもあり、大変に荒れ果てていました。それでもなんとか皆で力を合わせ、少しでも片付いたときは嬉しかったです。写真が出てきたときには涙が出そうになりました。その夜、小山さんから話を聞かせて頂き、大変強い方だなと思いました。自分のためになる話ばかりで、学ぶことばかりでした。今までお世話になった人に恩返ししているところが素晴らしい方だ

なと思いました。自分も大学に入り今までの19年間、いろんな人にお世話になってきましたが、お世話になった人に直接に恩を返さなくても、他の人にお世話になった分だけ返していればいいなと思いました。

三日目は、小山さん宅の田畑の掃除に行きましたが、たくさんのボランティアの方々と一緒にになり、作業が進み達成感を味わうことができました。それにしても、いろいろなところから来た人たちが一つの場所に集まり、皆で同じ目標に向かって頑張るといふ素晴らしい場所に自分もいたことに誇りを感じました。この経験を自分の体験だけに終わらせるのではなく、人に伝えられるような存在になりたいです。また大島に学びに来たいです。そして10年、20年後には観光のためにここを訪れたいです。貴重な体験ありがとうございました。

小山由紀子さんからの手紙

10月の活動を終えた後、ほぼ毎回、一度はお手伝いに伺わせてもらっている小山由紀子さんから、総合政策学部宛に手紙が届いた。これまでの活動に対するお礼が述べられており、被災地の人たちと少しずつ気持ちがつながり始めていることを実感した。多くの人を支援することはできないが、小さくても継続的な支援を目指そうとしてきたことの意義が、ようやく少し実現された気がした。振り返ると、この後も小山さんとのつながりはますます強まることになった。手紙1には、小山さんからの手紙をそのまま掲載する。達筆であられ、文字だけ書き写したのでは気持ちが伝わらないと感じたからである。



手紙1：小山由紀子さんからの手紙



写真25：真ん中が小山由紀子さん



写真26：津波の潮で枯れ始めた森林

3-7. 第6回教員・学生チーム訪問（2011年11月2日～11月7日）

久野 武（総合政策学部教授）
「気仙沼大島支援プロジェクトに参加して」

3.11の東日本大震災は衝撃的であった。TVですさまじい津波の映像をみたとき、人間の文明とはいっても、自然の猛威の前では所詮螻蛄の斧でないかという思いに駆られるとともに、自分も何かせぬとという気持ちに駆られた。

たまたま学部長のポストにあったので、直ちに学部教職員に呼びかけて義捐金を募り、それは今日まで続いている。また、学生諸君が直ちにボランティアにと動き出したときの感激も忘れられない。

やがて長峯先生を中心にした教員が震災支援委員会を立ち上げられ、学生を引率して、気仙沼大島にターゲットを決めた継続的な支援ボランティアを始められたと聞き、ただちにゼミ生諸君に呼びかけ参加を申し込んだ。実際には順番待ちもあり、実現したのは11月初旬の5日間であった。

参加したのは基礎演習から4名、もうすでに終了していた総政演習（2年）から7名、そして研究演習から2名の13名。男女別では男子3名、女子10名の13名であった。教員は長峯先生と上野先生、そして僕である。

学生諸君は大阪-仙台間を往復夜行バスで移動するが、定年間近いこの歳ではさすがに夜行バスはキツイとて、前夜空路で仙台に飛び一泊した。仙台の長距離バス乗り場での集合であるが、長峯先生が学生と一緒に夜行バスで来られたのには驚いた。聞けば毎回往復夜行バスとのこと。

気仙沼駅でバスから下車、タクシー分乗で気仙沼港に向かう。ここまではほとんど地震や津波の傷跡がわからなかったのだが、港に着く直前から風景が一変した。グラビアでみる戦災跡地のようなものが眼前に広がっているのだ。百聞は一見に如かず。さんざんTVで見た風景ではあるが、実際にこの目で見るのとではまるで違う。

大島では家屋の解体、田畠を覆った津波堆積物の除去、そして聞き取り調査と3班に分かれ、メンバーも毎日交代して作業を行った。教員も学生同様身体を動かし汗をかいてのボランティア作業であるが、その合間に被災された人々の話を聞き、その生々しさに息を飲む。ゼミ生諸君も全員マジメにボランティア作業に動いている。女子にはかなりハードな作業だったと思うが、誰も弱音をはかない。被災者のために少しでも役に立ちたいという思いで一杯なのだ。

民宿では思いのほかの豪華な夕食だった。さすがに晩酌は遠慮したが、一晚、部屋で学生諸君と酒を酌み交わしての交流会を行った。学年は違え

ど同じ久野ゼミだということで、絆もできたようである。実際になしえたことは僅かではあるが、教育的効果は大きく、被災者と学生との間に精神的な紐帯も生まれる。この試みをぜひ今後とも続けて行きたいものである。

常盤 明日美（総合政策学部4年）

私が大島を訪れたのは、2011年11月の初旬でした。3.11から約8ヶ月が経とうとしている中、初めて被災地に足を踏み入れたのです。気仙沼港に到着し、そこで見たものは、私の予想をはるかに上回る「被災」した街でした。海に近い場所は、8ヶ月も経っているにもかかわらず、復興の兆しは見え、何もない土地と瓦礫の山があるだけでした。浸水マップを作成する調査のため、大島の中を歩きながら多くの方々とお話をさせて頂き、津波の脅威というものを改めて肌で感じました。津波に巻き込まれた場所とそうでない場所がはっきりと見て取れる境界線を見て、多くの人々の命がこの線で左右されたのだと思うと、自然の残酷さを実感しました。

この支援プログラムを通して、本当にたくさんの被災された方々とお話をさせて頂くことができました。思い出すのもつらいであろう、当時の状況を詳細に説明して下さったこと、そして、微力な私たち学生を「ボランティア」として接して下さったこと、本当に感謝しています。力を貸すという立場でありながら、私たちの方が多くのものを与えて頂いたような気がします。現在も、被災ゴミの受け入れの問題や原発問題など、東日本大震災に関わる多くのニュースを目にします。そんな中、人々の心の中から「震災」が薄くなりつつあることも事実だと思います。今一度、少しでも早い復興のために、総合政策学部の学生として何

ができるのか、一人ひとりが考えていかなければならないと感じています。



写真27：大島の田尻地区、損壊した家々が撤去された空間



写真28：崩落した道路・堤防はまだ復旧せず



写真29：民宿「海鳳」の女将と大将⁸

8 民宿「海鳳」は、2011年7月以降、われわれの活動の拠点として、最も宿泊でお世話になっているところである。2011年8月の訪問時には、神戸三田キャンパス等の放置自転車7台を大島まで運び、民宿に置いてもらいながら、大島での移動に活用した。他にも島内での移動にはなにかと民宿のバスにお世話になってきた。そして大島を離れる際には、このように毎回見送りをしてくださる。

4. 2011年度の支援・調査活動を総括して (上野 真城子、総合政策学部教授)

4-1. 第2回教員調査チーム(2011年12月25日～ 12月28日)の活動

気仙沼大島支援プロジェクトでは、12月25日から4日間、教員4名による現地調査を行った。主たる目的は、6月以降これまで6回の訪問で行ってきた浸水域測定による地図「浸水マップ」を完成させることである。調査は年末の寒い時期でもあり、学生ボランティアは含めず、少数の教員のみで実施することとした。これまで何回か参加してきた教員それぞれにとって、プロジェクトの総復習をするよい機会になったと思う。以下、報告と個人的な感想を述べてみたい。

教員調査隊(長峯・客野・長谷川・上野)は一関市に集合し、車で気仙沼市へ移動し大島へ渡り、2日間は島で浸水マップ作成の調査を行い、大島中学校に教頭先生を訪ね、これまでの活動報告と今後の活動についての懇談、そして最後に気仙沼市役所の都市計画局を訪問し意見交換を行った。

加えて、当プロジェクトと直接関係するものではないが、総合政策学部教職員有志による被災地支援募金の支援先である2つの保育所(内ノ脇保育所とつばみ保育所)を慰問した。また、気仙沼市内の被災地の幾つかと唐桑舞根地区を視察した。車を使って移動したこの12月の調査は、短時間でありながら機動性に富み、極めて情報量の大きい行程であった。

主目的である浸水マップの完成作業は、これまでの調査において調べ落とした主道路から離れた数か所の集落・漁港を調査し、そして一部の場所については確認と再検証を行った。

震災から9ヶ月を経て、瓦礫がきれいに分別集積され、浦の浜に打ち上げられたフェリーも海に

戻され、一見荒々しい災害の爪痕はなくなった。いわば整理された喪失の光景に置き換わっている。きれいに修復された住宅がある一方で、完全消失した住宅の空地には新築の気配はない。荒涼として寒風に吹きさらされる冬の島の生活の厳しさが思いやられた。浸水マップは今回の調査で基本的データが整い、今後は客野先生のもとでGISマップが作成される予定である。



写真30：寒さが厳しい冬の調査

4-2. プロジェクトの意義と評価のための覚書

気仙沼大島支援プロジェクトは、ほぼ月1回のペースで、総合政策学部の教員と学生の協働ボランティア活動として行われてきたものである。そのプロセスと成果は、単にユニークな支援活動となってきたのみならず、アクション・リサーチとして極めて意義深い研究実践事例と見ることも出来る。未だ論とするには未熟だが、このプロジェクトの今後の展開のために、その位置づけについて簡単に示唆してみたい。

プロジェクトはこれまでの教員・学生の報告にあるように、2つの作業を並行して行ってきた。一つは、被災家屋の泥かき、清掃、海岸の瓦礫・ゴミ片付け、農地の瓦礫・土砂除去等、体を使っての労働作業である。これは多くの支援ボランティア活動と同様のものであるが、このプロジェ

クトでは同じ場所に少なくとも数回は訪れるので、必ずしも同じ学生が参加したということではないが、活動が継承されることによって、学生たちは島と島民への「つながり」意識を持つことが出来た。学生たちは、汗を流した労働体験と、それが被災者に大変に感謝され喜ばれたことを伝えられたうえで、この災害を自身の経験として記憶することができたといえる。この継承性はこのプロジェクトの特徴である。

もう一つの作業は、津波による浸水域の測定と地図「浸水マップ」作成のための調査活動である。津波がどこまで入りこみ、一軒一軒の住宅にどのような影響を与えたかという浸水範囲と浸水状況を判断分析する地図を作るものである。調査方法は、教員と学生がチームを組み、浸水範囲を確認する踏査観察であるが、この実際の過程で、当初は面接調査を予定していなかったが、浸水状況の事実検証をしながら、被災住宅で被災者と直接話す機会を得ることとなった。多くの被災者から被災の体験と心境を含めて語ってもらうことになり、こうした会話から事実確認以上の問題・課題、そして貴重な情報を得ることが出来た。

これは最初から調査が意図したことではなかったが、ここで学んだことは、被災者たちは、経験を語りたくないという意識があるということ（語りたくないという被災者も少なくないが）、被災の経験の記録づくりに調査研究としても取り組まなければならないということである。さらに滞在時には島民の方々に依頼して、経験を語ってもらった。それから見えてきたことも、島民はこの稀有な厳しい経験をきちんと伝えようとする一種使命感を持っているということである。これをこのプロジェクトの次の課題につなげるのは、当然の筋道といえるだろう。浸水マップという地図情報作成の調査方法によって、島民とのコミュニケーションを促し、次の活動を示唆するものとなったことは注目してよいことである。

気仙沼大島支援プロジェクトは、長峯先生が気仙沼の出身であったことで、震災直後から現地を訪ねていたことに触発されたものである。この地元出身者が持つ土地勘と多くの知己があることが、このプロジェクトを極めて有効なものとした。こうした地域との「関わり」がない場合、多くの支援活動がそうであるように、一回限り一か所限りの支援として終わりがちである。それにも意味はあるが、この個人的なつながりを核として生まれたプロジェクトは、継続性、そして関与する人々の信頼の醸成において重要な要素となる。プロジェクトに参加する者としては、この長所を強調しておきたい。

このプロジェクトは、非常にマイクロな活動を基軸としながら、アクション・リサーチという研究と行動を密接に関連付けて実践的に時代の問題にに応じていくという、総合政策の学際領域研究に研究方法の実証例を示すことができたと言えよう。

原発問題を含めて、東日本大震災はまだ進行中の災害である。何かが解決するという明瞭なプログラムが見えない中で、国・自治体、そして大小のNPOであっても、支援による解決は限られている。結局は、被災者一人ひとりの、小地域一つひとつの、自立的な再建努力が不可欠である。それには、大勢の個人とグループ・組織が小さな個別的な信頼関係を生み出し継続していくことが必須である。その関係の作り方とそのあり様は千差万別で、そこには定式的な形はない。災害復興は大きな国家課題であると共に、困難を抱えた新たな局面を迎えた同時代に生きる一人ひとりの生き方の課題であり、この支援プロジェクトは総合政策の課題を先取りするものとなりえる。

4-3. 個別箇所での記録

<ノート1. 気仙沼市の唐桑舞根（もうね）地区を訪問した際に>

牡蠣・ホタテ・ホヤを養殖し、その加工処理

で暮らしていた40軒余りの漁村集落は2軒を残してすべてが流された。地区の青年は、漁業は再生サイクルが早く、集落の人々に働く場を確保するため牡蠣の殻むき作業を始めたこと、集落が高台移転を決めたことなどを、淡々と語っていた。リアス式海岸の岩の壁一つひとつにある小さな集落が、どう自立復興できるのか、大島以上に厳しいものがあるように思われた。

<ノート2. 大島調査の際の会話から言葉を拾う>

- ・ つなプロ：島民の横に座って話を聞く。静かに聞く。そっと手助けをする。
- ・ 今、家を失ったものと失わなかったもの間に溝が大きくなっている。
- ・ 言葉が思わない傷になる。これからますます何を言うかが難しい。
- ・ 強くならざるを得ない。表面的には。
- ・ 何事においても、信頼関係があることが不可欠。
- ・ 島の外の人間は古い関係と無縁なので、そのことが、島の人間を助けることもある。
- ・ ボランティアの意味が分からなかった。何でこんな島に来るのかと不思議だった。今助かっている。学生さんに感謝している。本当に有り難い。
- ・ 寒くなって、ボランティアが減っている。少なくなるのが怖い。忘れられることが怖い。
- ・ みんなが誰でも立ち寄れるたまり場、店をつくりたい。文化の香り、ゆとりが大島には薄い。
- ・ 出来る人間が自由にやること。やってもらうこと。「調整しないこと」が重要。
- ・ 魚の恵み：豊かさ。ワカメ、ウニ、ホタテ、畑で野菜。意外な豊かさ。自給自足経済であった。島民はタンス預金が多かった。すべて流された。

<ノート3. 気仙沼市立・内ノ脇保育所を尋ねて>

浸水破壊した保育所。3.11後、3日間中央公民館屋上に避難。水、食糧、トイレ無しで、71名の乳幼児を抱えて避難した保育所。現在は合同保育所として60名、職員20名。ほとんど全員が仮設住宅に住んでいる。子供たちは夏の間は災害のことを忘れていた。寒くなって「あのときは寒かったね」という会話が出てきている。子供たちは本当にたくましい。笑い顔と元気な声が響いていた。

5. 浸水マップの地域への還元方法と今後の活動に向けて

5-1. 浸水マップ公開に際しての懸念

2011年の計8回の訪問を経て、とりあえず全島の浸水状況の調査を終え、浸水マップを作成するという作業までは進んだ。問題はこのマップを当初意図したように、いかに地域社会で活用してもらうべく還元していくかである。ところが、聞き取り調査による詳しい浸水マップが出来上がるに伴い、そこに含まれる個人情報について、いくつか懸念材料を抱えるようになった。浸水マップには各戸の被災状況という個人情報に関わる内容が含まれているからである。

第1に、被災した家屋については、行政から被災状況に関する判定が出ている。その判定とわれわれの作成した地図上の評価（判定）とが一致している保証はない。むしろ違っている可能性が高いということである。行政による判定は、義援金の支給額等につながってくるために重要な意味を持つ。そうした判定とわれわれの地図上の判定が食い違っていることで、何らかの問題に発展しないとも限らない。

第2に、家屋を流失あるいは損壊された被災者の方々が、浸水マップ上の自分の家があった場所を見て、どのような印象あるいは感情を持たれる

か、正直なところ分からないという問題である。自分の家に×印が付いているのを見て、感情を害される方がいるかもしれない。

そして第3に、作成した浸水マップにはそもそも誤りが含まれている可能性である。歩いて回って調べたとは言え、調査の基に使用した地図はやや古く、津波前の現況ですでに違っている部分があった。われわれが地図を見誤って調査したという可能性も皆無とは言えない。

5-2. 現地での報告会の開催

上記のような懸念材料があったことから、島内全体へ向けていきなり浸水マップを公開するのではなく、限定はされるが島内のリーダー的な住民の方々に集まってもらい、その中で浸水マップへの印象や公開に向けてのアドバイスを聞く、という場をまずは設けることにした。そこで前向きの意見をいただいた場合に、次の段階として島内全体へ向けての報告会あるいは情報提供を行うというプロセスをとることにした。

また、話は変わるが、震災後、被災地の津波前の街並みを模型で復元しようというプロジェクトが、建築を専門とする研究者グループによって進められてきた。気仙沼市を担当して模型を作成してきた研究者グループ（神戸大学工学部の槻橋准教授がリーダー）が、大島についても復元模型を作成し、その公表の機会を探っていたことから、われわれの浸水マップと共同で報告会を開催しようということになった。

そこで、島内に13ある自治会会長、老人クラブ会長、婦人会会長、商店会長、学校長といった人たちに参加を呼びかけ、2012年5月12日（土）に現地（大島開発総合センター）で出席者限定の報告会を開催した。報告会では、長峯の方からこれま

での支援活動の報告を行い、客野准教授からGISを用いて作成した2次元上の平面地図と3次元上に立体化した浸水マップの報告を行った（浸水マップ1と2を参照されたい⁹）。

浸水マップを作ることの意義としては、次の3点を指摘したい。

第1に、今回の震災・津波を風化させずに、それを50年後、100年後へと正しく伝えていくことの意義である。伝承方法はいろいろありうるだろうが、浸水マップもまたその有用な媒体になるべきものである。

第2に、浸水マップを前にして、住民たちで今後の地域社会や街・商店街の復興のための議論・話し合いのきっかけにして欲しいという点である。新しく街を再興していくには、安全、避難の容易さ、景観、アクセスの便利さ、買い物、観光、交通手段との連携など、いろいろな観点を考えていく必要がある。そうした議論をするための材料として、浸水マップを活用することができよう。

第3に、浸水マップを見たときの印象は、被災者一人ひとりで異なるものであろう。望むべくは、浸水マップを通じて島民の人たちにかつての街の思い出を共有していただき、そこから新しい生活や人生の出発点にしてもらいたいということである。これは調査をした者からの一方的な願いにすぎないのかもしれない。

かくして報告会では、聞き取り調査を基にして浸水マップづくりを行ったわれわれの活動に対して、まずは感謝の声をいただいた。そして、浸水マップの公開に関しては、「行政が作成した浸水マップとは異なるものである」「われわれ研究グループが調査目的で自ら作成したものである」といった断りを明記することで、公開しても構わないし、問題や混乱も起きないだろう、という意

9 ここには個人情報特定できない程度の全体的な地図のみを掲載する。GISでデータ化された地図は、いろいろな角度から容易に加工することが可能である。

見・アドバイスをいただいた。

また、今後もし震災記念館のようなものが整備されたあかつきには、その建物内で浸水マップの映像を流し、街並みの復元模型を展示するという活用がなされれば理想である、という期待の声もいただいた。

5-3. 今後の活動に向けて

寒さの厳しい冬場は活動を休止したが、2012年度に入り、気候が暖かくなり始めた5月の報告会開催と同時に、学生たちとの支援活動を再び開始することにした¹⁰。被災地の復旧・復興という点では未だ遅々とした状態と言えるが、破壊された家々等の散乱した状態は見られなくなり、そうした場所は整地された広々とした空間や緑の生い茂った光景に変貌した。大量の瓦礫片付けといった作業はもはや必要ないとは言え、現地を精査すれば、やるべき仕事が残されていることにも気付く。たとえば海岸や浜には、これまであまり人が入っていなかった場所がある。またゴミの漂着は今後数年間続くとも言われている。その点では、今後はむしろ小さなボランティア・グループの貢献できる場があるのではとも言える。また復旧が進むにつれ、産業を再開するための支援活動という新たなニーズも出てきている。

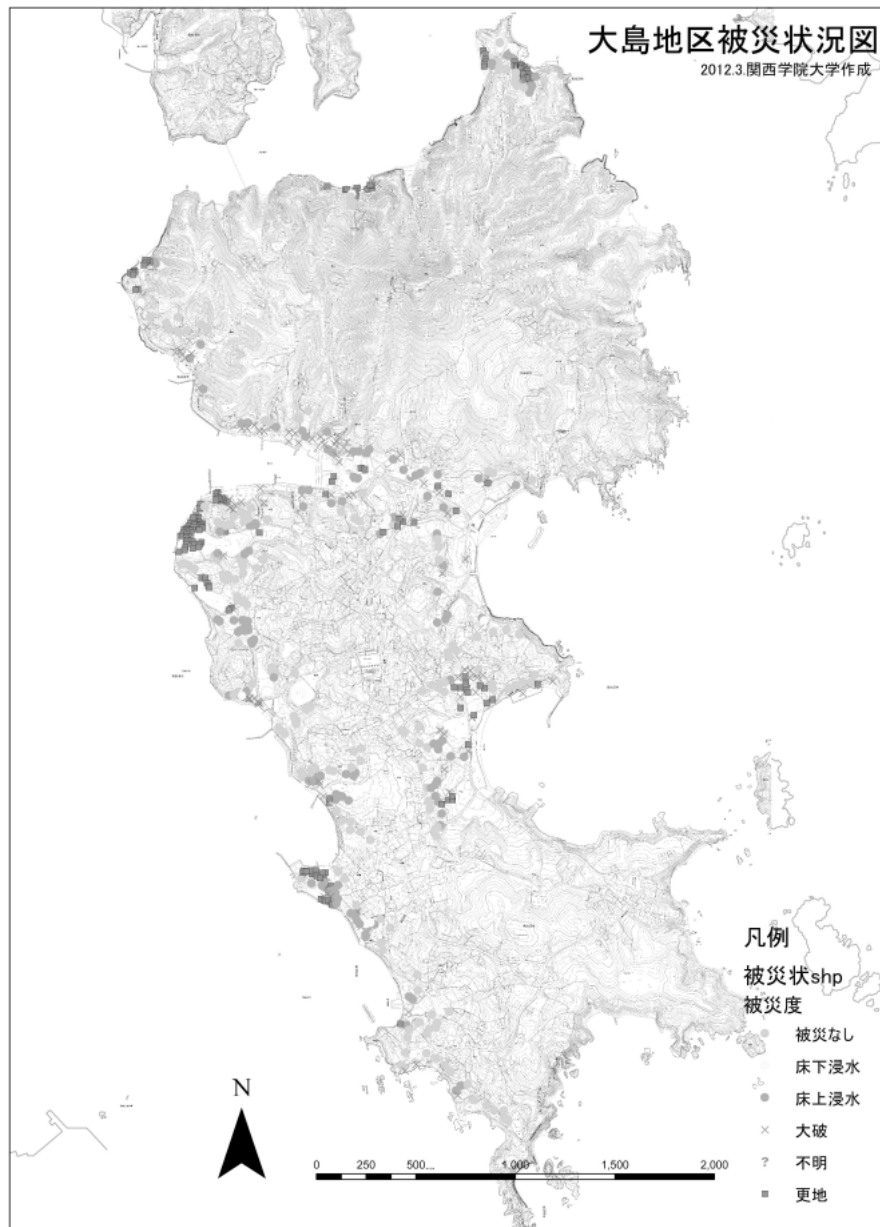
そして2012年度には、新たに「避難・被災の記録づくり」をテーマにした調査を始めることにした。浸水マップ作成のための現地の人たちへの聞き取り調査において、単に「津波がどこまで来たか」という情報だけでなく、地震直後の避難時の行動や津波浸水時の行動、そして被災後の状況等について、住民たちが多くの貴重な経験と情報を持っていることに気づかされた。それは、それらの避難・被災時の記憶を風化させず、その①記録を留めることの価値と重要性、②その記録を後世

に残す手立てを講じておく必要性、そして③その経験と情報の中から今後の減災対策やまちづくりへの知見を引き出す重要性、を考えさせるものであった。

浸水マップを地域社会へ還元するための活動も引き続き模索していく予定である。街並みの復元模型を製作しているグループとも引き続き連携をしながら、大島の今後の復興まちづくりや減災対策、産業や観光の復興に向けての支援・協力をできないかと思案しているところである。

こうして2011年度から2012年度にかけての活動を振り返ってきたが、これはわれわれのグループの力だけで継続できたことではないことに、つくづくと気づかされる。今後も周りの人たちにお世話になり続けることであろうが、それでも被災地の復旧・復興を祈りながら、その一端に関わっていくことの意義を信じ、活動を続けていきたいと思う。2012年度の活動については、改めて報告をさせていただきたい。

10 本稿の校了段階で、2012年度も5月から10月にかけて、教員・学生チームで6回の訪問を果たした。その活動報告は改めて行う予定である。



浸水マップ1：大島全島の浸水マップ平面図

